

Rgyud bu chung に見られるペマリンパの思想

安 田 章 紀

1. 序 ペマリンパ (Padma gling pa, 1450–1521) は現在のブータン王国のブムタン (Bum thang) 地方に生まれ、同地方を主要な活動の舞台としながら、その生涯を「テルマ」(gter ma, 埋蔵宝) の発掘や寺院の建設に捧げた。「テルマ」とは、ニンマ派の開祖パドマサンバヴァ (Padmasambhava) が地中や洞窟など人目につかないところに埋蔵したと伝えられる書籍や仏像類などのことであるが、その発掘者である「テルトン」(gter ston, 埋蔵宝発見者) として彼は生前から勇名を馳せ、後世、「5 人のテルトン王」(gter ston rgyal po lnga) というニンマ派史上最も偉大なテルトンたちの 1 人に数えられるに至っている。したがって、ニンマ派研究を進める上でペマリンパは避けて通ることのできない存在である。彼の伝記については既に詳細な研究が行われているが¹⁾、思想面は全くと言っていいほど解明されていない。本稿では、ペマリンパがテルトンとして自ら発掘したとされる数多くのテルマのうち、*Rgyud bu chung* (『小編タントラ』) と呼ばれる文献群に着目し、その分析を通してペマリンパの思想の一端を明らかにしたい。

2. *Rgyud bu chung* の構成 *Rgyud bu chung* は以下の表に示した 22 篇の、目録およびタントラから構成されている。

0	<i>Snying tig gsang ba'i rgyud kyi kha byang</i>				
1	<i>'Od zer can</i>	2	<i>*Bkra shis mdzes ldan</i>	3	<i>*Sgra thal 'gyur</i>
4	<i>*Kun bzang klong drug</i>	5	<i>*Rdo rje sems dpa' snying gi me long</i>	6	<i>Gtsug na me 'bar</i>
7	<i>*Rdzogs pa rang 'byung</i>	8	<i>*Rig pa rang shar</i>	9	<i>*Rig pa rang grol</i>
10	<i>Che mchog dgongs pa</i>	11	<i>*Seng ge rtsal rdzogs</i>	12	<i>*Yi ge med pa</i>
13	<i>*Sgron ma 'bar ba</i>	14	<i>*Nyi zla kha sbyor</i>	15	<i>*Ngo sprod spras pa</i>
16	<i>Bstan pa bu gcig</i>	17	<i>*Sku gdung 'bar ba</i>	18	<i>*Mu tig phreng ba</i>

19	* <i>Nor bu phra bkod</i>	20	* <i>Rin chen spungs pa</i>	21	* <i>Kun bzang thugs kyi me long</i>
----	---------------------------	----	-----------------------------	----	--------------------------------------

(0) は *Rgyud bu chung* 全体の目録である。(1) から (21) はそれぞれが独立したタントラであり、ニンマ派独自の思想として著名な「ゾクチェン」(rdzogs chen)の一流儀である「ニンティク」(snying tig) について、理論と実践双方の観点から幅広い主題を論じている。これら 21 篇のタントラは 2 グループに大別される。「ニンティクの、極秘にして無上の 17 篇のタントラから繰り返し要略した 17 の小タントラ、および 4 篇の補足 (kha skong), 以上 21 篇が『小編タントラ』と呼ばれる。」²⁾ すなわち、もともとの「極秘にして無上の」タントラ 17 篇を略本にした「17 の小タントラ」を中核とし、そこに 4 篇の「補足」タントラを付け足したのである。表中の*を付けたものが第 1 グループに属し、下線を引いた 4 つが補足タントラに該当する。本稿では紙数の都合により、4 篇の補足タントラに的を絞って内容の紹介と分析を試みる。

3. 4 篇の補足タントラ 4 篇の補足タントラの概要は以下のようなものである。(1) *'Od zer can* は後述する「根基」(gzhi) という概念および仏陀の三身について記述する。(6) *Gtsug na me 'bar* は正式には *Dbang bzhi'i spyi bsdoms gtsug na me 'bar gyi rgyud* という名称を持ち、「4 つの灌頂」(dbang bzhi) の「梗概」(spyi bsdoms) を述べる。(10) *Che mchog dgongs pa* は *Gtsug na me 'bar* 同様、灌頂について解説する。冒頭に灌頂全般についての概説が置かれ、その後、4 つの灌頂の 3 番目にあたる「般若智慧灌頂」の式次第を詳述する。(16) *Bstan pa bu gcig* は遥か昔から現在までに出現した仏陀の長大な系譜と、身口意の鍛錬などの雑多な修行法を列挙する。

4. 補足タントラの思想

4. 1. *Rgyud bu chung* の由来 ペマリンパの自伝によれば、*Rgyud bu chung* はもともと「シェラブメバル」(Shes rab me 'bar, 1267–1326) なる人物によって発見されたが、ゆえ有って彼はそれを再び埋蔵した。時を経てペマリンパが改めてそれを発見し、ようやく流布することになった³⁾。ゆえに *Rgyud bu chung* はペマリンパ自身の著作ではない。しかし、ペマリンパがそれを自らのテルマの 1 つと確かに位置づけている以上、そこに含まれる思想は彼の自家薬籠中のものとなっていたと考えるのが自然である。以下、理論面で「存在論」、実践面で「灌頂論」という主題を設け、補足タントラ中の関連箇所を読解を通して、ペマリンパの思想

(78) *Rgyud bu chung* に見られるペマリンパの思想 (安 田)

にアプローチする。

4.2. 存在論 ペマリンパは 'Od zer can において、「原初の全般的根基」(thog ma'i spyi gzhi)⁴⁾、或いは短く「根基」(gzhi) と呼ばれる存在を設定している。これは「真正の法身」(yang dag pa'i chos sku)、「原初の庇護者である不変の光」(thog ma'i mgon po 'od mi 'gyur ba)、「もとよりありのままの君主」(ye ji bzhin pa'i mnga' bdag) などと複数の異称でも呼ばれている⁵⁾。この「根基」は「内なる3つの智慧〔からなる〕観智」(nang ye shes gsum gyi rig pa) という異名の1つが示唆するように、3つの側面を持っている。すなわち、(1)「本体である絶対清浄の智慧」(ngo bo ka dag ye shes)、(2)「本性である自然成立の智慧」(rang bzhin lhun grub ye shes)、(3)「慈悲である自発的顕現の智慧」(thugs rje rang snang ye shes)⁶⁾である。(1)は「本体である絶対清浄の智慧」(ngo bo ka dag ye shes)には『無明』というものが有り得ないので、1つであるとか2つであるなどと数えようがない。何にも分割しようのない法性であり、単なる智慧としてさえ成り立つことがない。」⁷⁾との記述があるように、「智慧」の名称は仮のものにすぎず、実際のところは、「何ものかとして成立すること」を受け付けない、まっさらな空白である。(2)は「本性である自然成立の智慧」(rang bzhin lhun grub ye shes)は生ぜず滅せず、何もお考えにならない(cir mi dgongs)。対象(yul)と理解(nges pa)が無いので、滅することの無い('gag med pa)活力(ritsal)と徳性(yon tan)によって、純粹な戯れ(rol pa tsam)として顕現する。」⁸⁾との記述があるように、「智慧」と名付けられているものの、(1)と同様、何ら知的作用を伴っておらず、生滅変化の埒外で自律的に躍動し続ける、盲目的な活発性である。(3)は「慈悲である遍満の智慧」(thugs rje kun khyab ye shes)において、「中略」知性としての智慧(ye shes mkhyen pa)を完備した局面が間接的に、有情に対して出現する。」⁹⁾との記述があるように、「智慧」の名の通り明確な知的性質を帯び、自らを空間的に満ち溢れさせながら露わにしていくという、具象的な位相である。

根基は以上3つの位相が積み重なった重層的存在であるが、これら3つは順に仏陀の三身、すなわち、法身、受用身、化身の基盤をなすとされている¹⁰⁾。つまり、根基は仏陀の悟りの世界を支える土台としての役割を持つ。しかし、その一方で、「絶対清浄」(ka dag)は無迷乱('khrul med)と説かれる。自然成立 (lhun grub)は、迷乱の基盤('khrul gzhi)として説かれるもの全ての「更に根本的な」迷乱基盤である。化身〔の基盤〕は道〔を歩む過程で出来する〕迷乱の基盤(lam gyi 'khrul gzhi)と説かれる。」¹¹⁾との記述が見出され、ありとあらゆる迷妄がもと

を辿れば根基に遡ることが示唆されている。そもそも根基は既述の通り「原初の」(thog ma) という語を冠して呼ばれていた。したがって、ペマリンパにおいて、根基という存在は輪廻と涅槃、迷いと悟りの双方に先立って存在する第一前提であり、迷悟が共に依って立つところの究極的な基底であったと言えよう。

4.3. 灌頂論 ペマリンパは *Gtsug na me 'bar* および *Che mchog dgongs pa* において、インド・チベットを通じて広く流布した4階梯の灌頂体系を踏襲している。すなわち、「瓶灌頂」(bum dbang), 「秘密灌頂」(gsang dbang), 「般若智慧灌頂」(shes rab ye shes dbang), 「語灌頂」(tshig dbang) である。これらは順に「有戲論」, 「無戲論」, 「極無戲論」, 「上無戲論」と呼ばれ¹²⁾, 修行者を次第に戲論を絶った高度な境地に導いていくことを目的としている。*Che mchog dgongs pa* によると、4つの灌頂はそれぞれ灌頂の受け手に対し、以下の表に示すような浄化や成熟、歓喜など種々の効能をもたらす¹³⁾。

灌頂	瓶	秘密	般若智慧	語
浄化対象	身	口	意	身口意
修習の資格	生起次第	体内熱	虹の身体	空性
成熟対象	脈	風	滴	心
所断	笑うこと	見ること	手を握ること	性交
歓喜	歓喜	最勝歓喜	離歓喜	俱生歓喜
印	三昧耶	羯磨	法	大
果	化身	受用身	法身	自性身

このうち、「般若智慧灌頂」については *Che mchog dgongs pa* に詳細な式次第の説明が見られるが、要約すると以下の通りである。(1) 儀礼の実施場所として人里離れた心地よい場所を選ぶ¹⁴⁾。(2) 馬頭尊 (Rta mgrin) と金剛亥母 (Rdo rje phag mo), パドマサンバヴァとイエシェツォギヤル (Ye shes mtsho rgyal) という2組の父母尊 (yab yum) を中央に配したマンダラを描き、請願とともに奉獻する。その際、「印母」(phyag rgya) と呼ばれる導師の女性パートナーも、特に洗い清め飾り立てて待機させておく¹⁵⁾。(3) 弟子が導師に灌頂の授与を請い、導師はそれに対して「女性を遠ざけず、受け入れるべし」などの三昧耶を授ける¹⁶⁾。(4) 導師と男性の弟子たちは生起次第によって自らを馬頭尊として観想する。眉間、喉、胸、臍にはそれぞれ、金剛、宝、蓮華、業部族のダーカ (dpa' bo) を、頭頂にはパドマサンバヴァを思い浮かべる。一方、印母と女性の弟子たちは自らを金

(80)

*Rgyud bu chung*に見られるペマリンパの思想 (安 田)

剛亥母として観想し、男性と同様の箇所と同じ部族のダーキニー (mkha' 'gro) を、頭頂にはイエシェツォギャルを思い浮かべる¹⁷⁾。(5) 弟子たちは目隠しをして、男性は金剛亥母、女性は馬頭尊を眼前に観想し、自らの胸部に発した光線を通してそれら目前の尊格と溶け合い、歓喜に我知らず身を躍らせるさまを思い描く。弟子たちは目隠しを外し、導師に聖別を受けた後、香を焚く、楽器を奏でる、甘露を味わうなどの遊興に耽る¹⁸⁾。(6) 導師は「女陰はあらゆる秘密真言の蔵である」などと、女陰の神聖さを繰り返し弟子たちに説いて聞かせる¹⁹⁾。(7) 印母の口からも同趣旨の宣言が発せられた後、導師は印母を弟子の1人に委ね、弟子たちは男女1組になって性交する。その際、性別に応じて(4)の生起次第を再び行うが、今回はパドマサンバヴァとイエシェツォギャルなど、男女の尊格5組がそれぞれ交わり絡み合っているものを観想する²⁰⁾。(8) 体内の各所に思い浮かべたそれらの父母尊が、性交のさなか、上から順に「秘密の徴を保つ灌頂」(gsang rtags 'chang ba'i dbang), 「清浄な明・空の灌頂」(gsal stong dag pa'i dbang), 「清浄な顕・空の灌頂」(snang stong dag pa'i dbang), 「清浄な楽・空の灌頂」(bde stong dag pa'i dbang), 「大遊戯の灌頂」(rol pa chen po'i dbang) という5つの灌頂を次々に得ていき、最後に、現実に関わっている弟子たち自身に他ならない馬頭尊と金剛亥母が「般若智慧灌頂」を得ると念じる²¹⁾。

5. まとめ 本稿はいまだ謎に包まれているペマリンパの思想研究に先鞭をつけるべく、彼のテルマの1つ *Rgyud bu chung* に含まれる4篇の補足タントラに焦点を当て、理論と実践の両側面から彼の思想を読み解いた。今後の課題としては、考察の範囲を *Rgyud bu chung* 所収の「17の小タントラ」や別のテルマにも拡大し、ペマリンパの思想をより広く深く多面的に究明することが望まれる。

1) Aris 1988; Harding 2003.

2) *Snying tig gsang ba'i rgyud kyi kha byang*, 6.1-3: snying tig yang gsang bla na med pa yi / bcu bdun rgyud las yang dang yang du btus / rgyud chung bcu bdun kha skong bzhi dang bcas / nyi shu rtsa gcig rgyud bu chung zhes grags /.

3) Aris 1983: 217-218; Harding 2003: 45-46.

4) *'Od zer can*, 19.6.5) *Ibid.*, 18.6, 20.6.6) *Ibid.*, 18.6-19.1.7) *Ibid.*, 19.1-2: ngo bo ka dag ye shes la / ma rig pa zhes ma srid pas / gcig dang gnyis shes bgrang du med / gang du ma phyas chos nyid la / ye shes tsam du grub pa med /.8) *Ibid.*, 19.2-3: rang bzhin lhun grub ye shes ni / ma skyes mi 'gag cir mi dgongs / yul dang nges pa med pa'i phyir / rtsal dang yon tan 'gag med pas / rol pa tsam du snang ba la /.9) *Ibid.*, 19.3-4: thugs rje kun khyab ye shes la / ... ye shes mkhyen pa rdzogs pa'i cha / shugs kyis sems can rnams la 'char /.10) *Ibid.*, 22.6: chos sku'i gzhi ka dag gtan la phab bo / longs sku'i gzhi lhun grub gtan la phab bo / sprul sku'i gzhi sna tshogs gtan la phab bo /.

- 11) Ibid., 23.1: ka dag 'khrul med du bstan / lhun grub 'khrul gzhir bstan pa thams cad kyi 'khrul gzhi'o / sprul sku lam gyi 'khrul gzhir bstan pa'o /. 12) *Gtsug na me 'bar*, 224.4–5: spros bcas bum pa phyi dbang dang / spros med nang gi gsang dbang dang / shin tu spros med sher ye'i dbang / rab tu spros med tshig dbang rin po che / snod ldan bu la rim bzhin bskur /. 13) *Che mchog dgongs pa*, 370.3–5, 371.1–3, 371.6–372.3. 14) Ibid., 372.4–5. 15) Ibid., 372.5–374.2. 16) Ibid., 374.2–375.3. 17) Ibid., 375.3–378.1. 18) Ibid., 378.1–379.1. 19) Ibid., 379.1–381.1. 20) Ibid., 381.1–382.1. 21) Ibid., 382.1–383.6.

〈参考文献〉

Bstan pa bu gcig: *Bstan pa thams cad kyi bu gcig po*. *Rgyud bu chung*, 579.1–607.6.

Che mchog dgongs pa: *Che mchog dgongs pa'i rgyud*. Ibid., 367.1–386.1.

Gtsug na me 'bar: *Dbang bzhi'i spyi bsdoms gtsug na me 'bar gyi rgyud*. Ibid., 222.1–226.2.

'Od zer can: *Thog ma'i sangs rgyas 'od mi 'gyur ba sku gsum brgyud pa'i lo rgyus*. Ibid., 15.1–47.3.

Rgyud bu chung: *Rgyud bu chung gi chos sde*. *Rig 'dzin Padma gling pa yi zab gter chos mdzod rin po che*, vol. 6, 1.1–739.2.

Rig 'dzin Padma gling pa yi zab gter chos mdzod rin po che, Padma gling pa (1450–1521). 21 vols. Thimpu: Kunsang Tobgay, 1975–1976.

Snying tig gsang ba'i rgyud kyi kha byang. *Rgyud bu chung*, 5.1–13.5.

Aris, Michael 1988: *Hidden Treasures and Secret Lives: A Study of Pemalingpa (1450–1521) and the Sixth Dalai Lama (1683–1706)*. London: Keagan Paul.

Harding, Sarah 2003: *The Life and Revelations of Pema Lingpa*. Ithaca: Snow Lion.

〈キーワード〉 ブータン, ペマリンパ, ニンマ派, テルマ, *Rgyud bu chung*

(京都女子大学非常勤講師, 博士 (文学))